

# 私たちが 未来をつくる

全ての人により良い世界を――。  
そんな願いを込めて掲げられた世界の新しい目標  
「持続可能な開発目標(SDGs)」が、いよいよ2016年から始まる。  
そこには、私たち一人一人にできることが、きっとあるはずだ。

編集協力：公益財団法人地球環境戦略研究機関(IGES) 森秀行所長

## 17の目標と 169のターゲット

今年12月31日、ある目標が期限を迎えるのをご存知だろうか。

2000年に採択された「国連ミレニアム宣言」に基づく「ミレニアム開発目標(MDGs)」の達成期限が今年、2015年だ。MDGsでは、開発途上国の貧困削減に向けた8つ

の目標と21のターゲットが設定され、具体的な数値目標を踏まえた開発協力が展開された。その結果、最貧困層が1990年の19億人から2015年の8億3600万人まで半減するなど、一定の成果を挙げている。その一方で、紛争地域の人々や女性など、一部の人々が発展から取り残される不平等の存在も指摘された。

そうした流れを受けて今年9月に採択されたのが、2030年までの15年間を実施期間とする「持続可能な開発目標(SDGs)」だ。SDGsでは、達成が不十分だった一部のMDGsの目標を引き継ぐとともに、先進国を含めた世界全体の持続可能な発展に向けた目標や、先進国と開発途上国の協力関係を深めるための目標が加わっている。

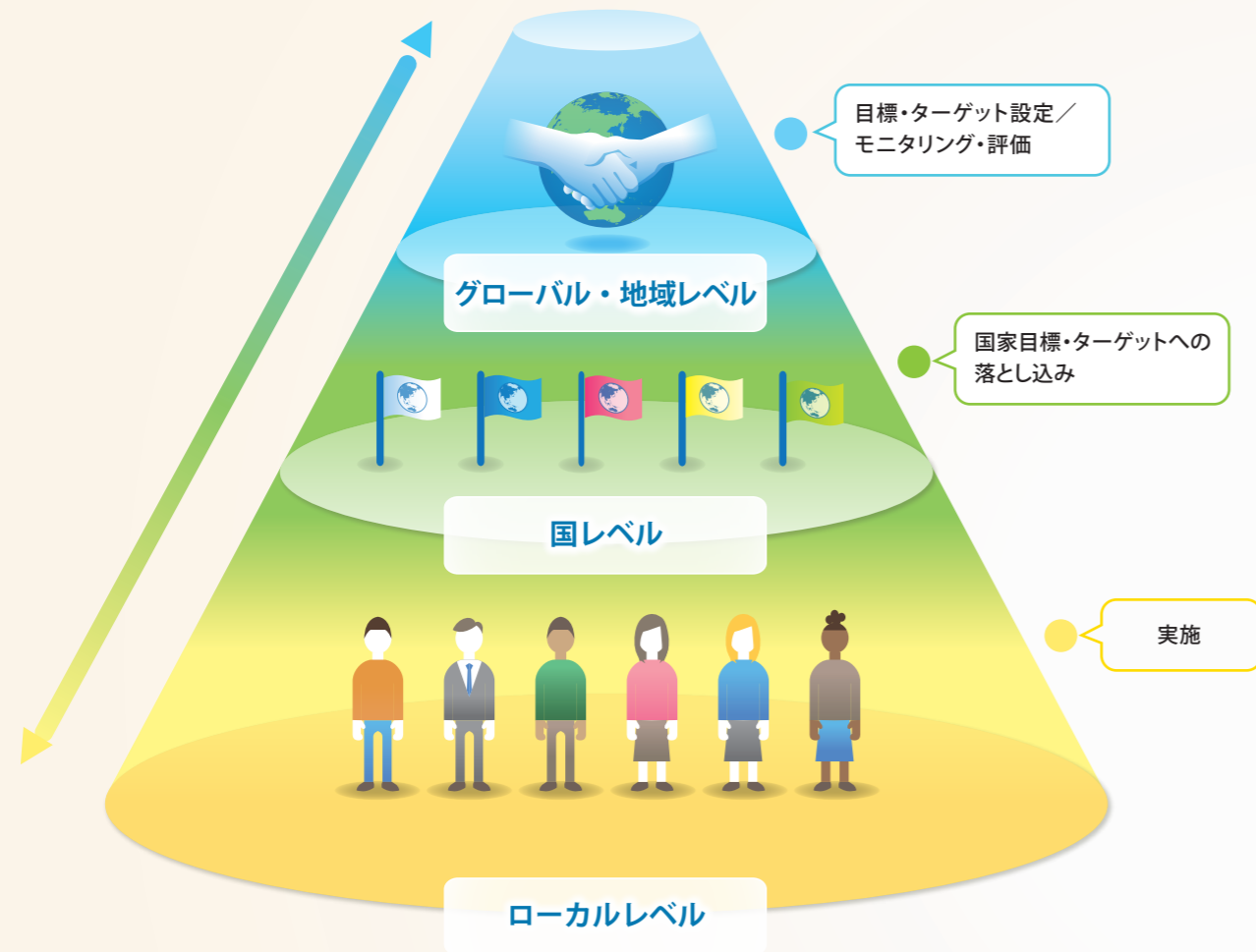
「D、つまり『Development』が日本語で『開発』と訳されているので、SDGsも途上国の問題と思われられるかもしれませんが、これを『発展』と理解すれば、世界全体の課題であることがより実感できるのではないのでしょうか」と、公益財団法人地球環境戦略研究機関(IGES)の森秀行所長は指摘する。

SDGsは、1992年にリオデジャネイロでの地球サミットで採択された行動計画「アジェンダ21」の延長上にあるという考え方もある。

### SDGsの17の目標



# 私たちに何が出来る？



全ての人の参画を

グローバル・地域レベルで策定された目標を、国やローカルレベルの政策に反映させ、それぞれのレベルであらゆる関係者と協働しながら実施し、評価とレビューを行うことが大切。

「誰一人取り残されない」というものがある。貧困、紛争、災害など、過酷な状況下にある人たちに手を差し伸べる協力が同時に、全ての主体がさらなる発展に向けて身近な課題を解決していくことで、私たちが豊かさを手に入れる、新しい未来が見えてくるはずだ。

SDGsの精神を象徴する言葉に、「誰一人取り残されない」というものがある。貧困、紛争、災害など、過酷な状況下にある人たちに手を差し伸べる協力が同時に、全ての主体がさらなる発展に向けて身近な課題を解決していくことで、私たちが豊かさを手に入れる、新しい未来が見えてくるはずだ。

SDGsの精神を象徴する言葉に、「誰一人取り残されない」というものがある。貧困、紛争、災害など、過酷な状況下にある人たちに手を差し伸べる協力が同時に、全ての主体がさらなる発展に向けて身近な課題を解決していくことで、私たちが豊かさを手に入れる、新しい未来が見えてくるはずだ。

# 新たな開発目標 SDGs の特徴



「5つのP」と日本の取り組み

「誰一人取り残されない」をキーワードに、People (人間)、Planet (地球)、Prosperity (繁栄)、Peace (平和)、Partnership (連携) の「5つのP」に焦点を当てて取り組むことが掲げられた。

アジェンダ21では、社会の発展に必要な環境資源を保護・更新する経済活動への移行が強調され、その一環として貧困削減なども掲げられていたからだ。

もう一つ、SDGsの目標が多角化した理由として、MDGsが一定の成功を収めたことが挙げられる。MDGsは国連本部が軸となって、幅広い分野の取り組みを主導した。その結果、世間の注目が集まり、目標達成に向けた新たな基金が設立されるなどしたことから、MDGsに参画していなかった国連機関などが、より積極的に参画したのだ。中でも、明確な目標を掲げて国や企業、個人など、多彩なステークホルダーにアプローチする手法は、MDGsへの取り組みを通して定着した。

森所長は、「SDGsの内容に目を通し、それぞれの目標やターゲットが誰に向けたもので、どの主体が、これらにどう関わってくるかを考えることが大切です」と強調する。特に、貧困や環境面の課題などでは、途上国と先進国の違いはもちろん、一つの国でも都市と地方で状況が大きく違うため、世界共通の数値目標を作ることは難しい。事実、今回、環境